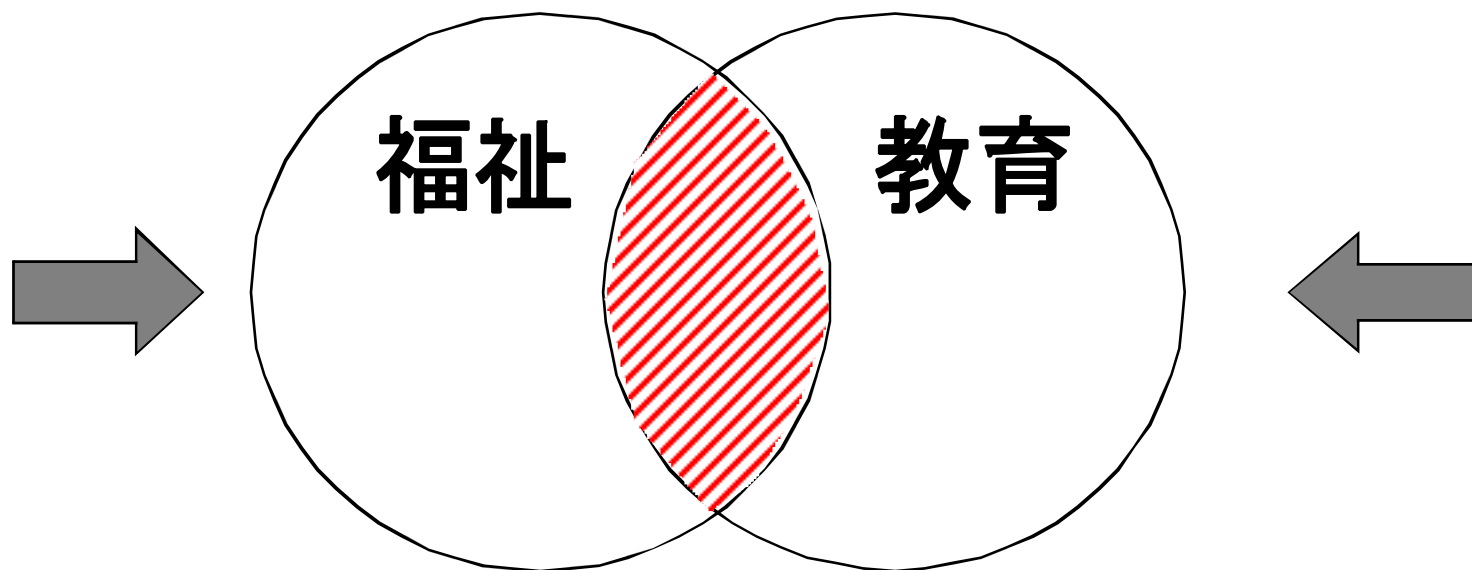


社会的包摂にむけた福祉教育

日本福祉大学

原田正樹

福祉と教育の接近性



福祉教育と教育福祉

福祉教育

- ・福祉の価値を学ぶことが、子どもの成長の糧になる。(共に生きる力を育む)
- ・生涯学習を通して、地域住民の福祉意識を涵養し、地域の福祉力を高める。
- ・地域の社会的排除を解消していく、意識改革。

教育福祉

- ・教育と福祉の谷間にある教育権と生存権の諸問題。子どもの貧困
例 貧困連鎖、家庭環境、虐待、ひきこもり、退学者、障害のある子どもの生活・・・

生活困窮者支援の基本的視点

「つながりの再構築」

生活困窮者が孤立化し自分に価値を見出せないでいる限り、主体的な参加へ向かうことは難しい。一人一人が社会とのつながりを強め周囲から承認されているという実感を得ることができるとは、自立に向けて足を踏み出すための条件である。新たな生活支援体系は、地域社会の住民をはじめとする様々な人々と資源を束ね、孤立している人々が地域社会の一員として尊ばれ、多様なつながりを再生・創造できることを目指す。そのつながりこそ人々の主体的な参加を可能にし、その基盤となる。

【社会保障審議会・特別部会報告】

生活困窮者支援の基本的視点

「自立と尊厳」

すべての生活困窮者の社会的経済的な自立を実現するための支援は、生活困窮者一人一人の尊厳と主体性を重んじたものでなければならない。人々の内面からわき起こる意欲や幸福追求に向けた想いは、生活支援が依拠すべき最大のよりどころであり、こうした意欲や想いに寄り添ってこそ効果的な支援がすすめられる。

【社会保障審議会・特別部会報告】

排除のない地域づくりの創造

- 社会的排除／社会的包摂
- 共生社会をめざし、相互に支えあうことができる地域社会 → ケアリングコミュニティ

「私の問題」を「私とあなた問題」にする。

「私とあなたの問題」を「私たちの問題」にする。

福祉教育を展開するプログラムとシステム

例 障害者権利条約、障害者差別解消法

→ 障害理解をどうすすめるか

障害理解の問題点

疑似体験プログラム

1981年 国際障害者年（「完全参加と平等」）

ノーマライゼーションの普及にむけて、
障害への関心と理解を求める。

障害への理解

「能力障害」の疑似体験による関心の喚起

→ 国際障害分類（1980年）

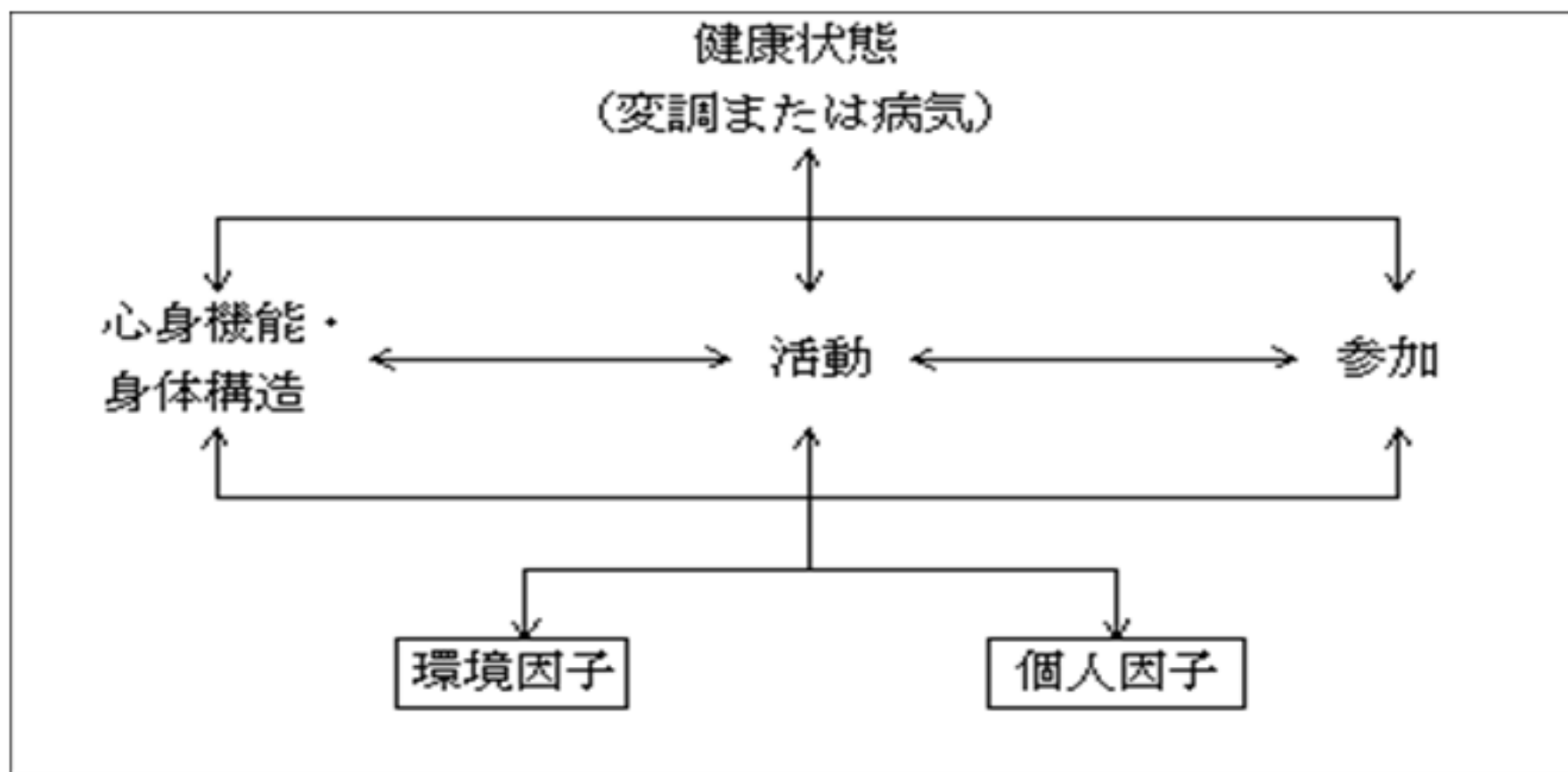
ところが、本当にこれでいいのか。（1990年代）

現在、2000年以降、新しいプログラムの開発

新しい福祉観・障害観

- 国際障害分類 (ICIDH)
障害構造モデル (1980年) から、
 - 国際生活機能分類 (ICF) へ
ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health)
- 生活機能の分類法として、2001年5月、世界保健機関 (WHO) 総会において採択された。

ICFの概念図



ストレングスの視点

【ICIDH】



【ICF】



環境因子という視点

生活のしずらさは、
本人の疾病や機能障害だけではなく、
その人が生活している「環境」によって左右する。

障害とは、社会のバリア(障壁)によって、
作りだされる。「障害を被る人たち」

障害とは、地域社会の全体の問題として捉える。

これからの障害観

国際生活機能分類(ICF)

その人の生活機能に着目する。

(生活上できること、できないこと)

一人ひとりの違いと同じを大切にする。

「個別化」と「普遍的価値(権利)」

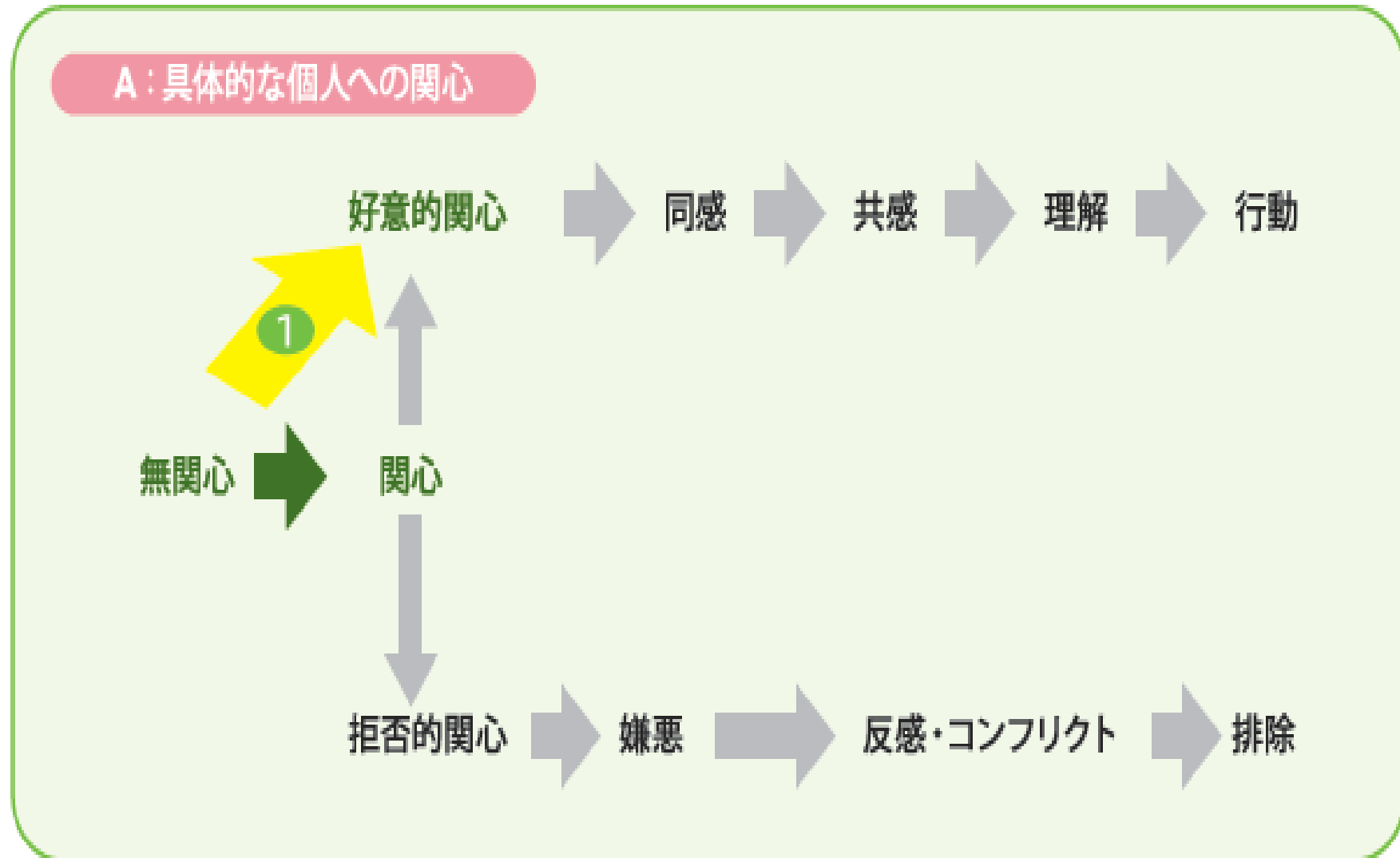
医学モデルではなく、

生活を基本とした社会モデルでとらえる。

ICFの視点を導入した福祉教育

- 生活機能として、例えば
 - 「趣味」に関すること、
 - 「コミュニケーション」に関すること、
 - 「食」に関すること、
 - 「仕事」に関すること、
 - 「スポーツや余暇」に関すること、など
- ひとりひとりちがう人間、みんなみんな同じ人間
(小学校6年生女子)

福祉意識の変化 「関心」の持つ二面性

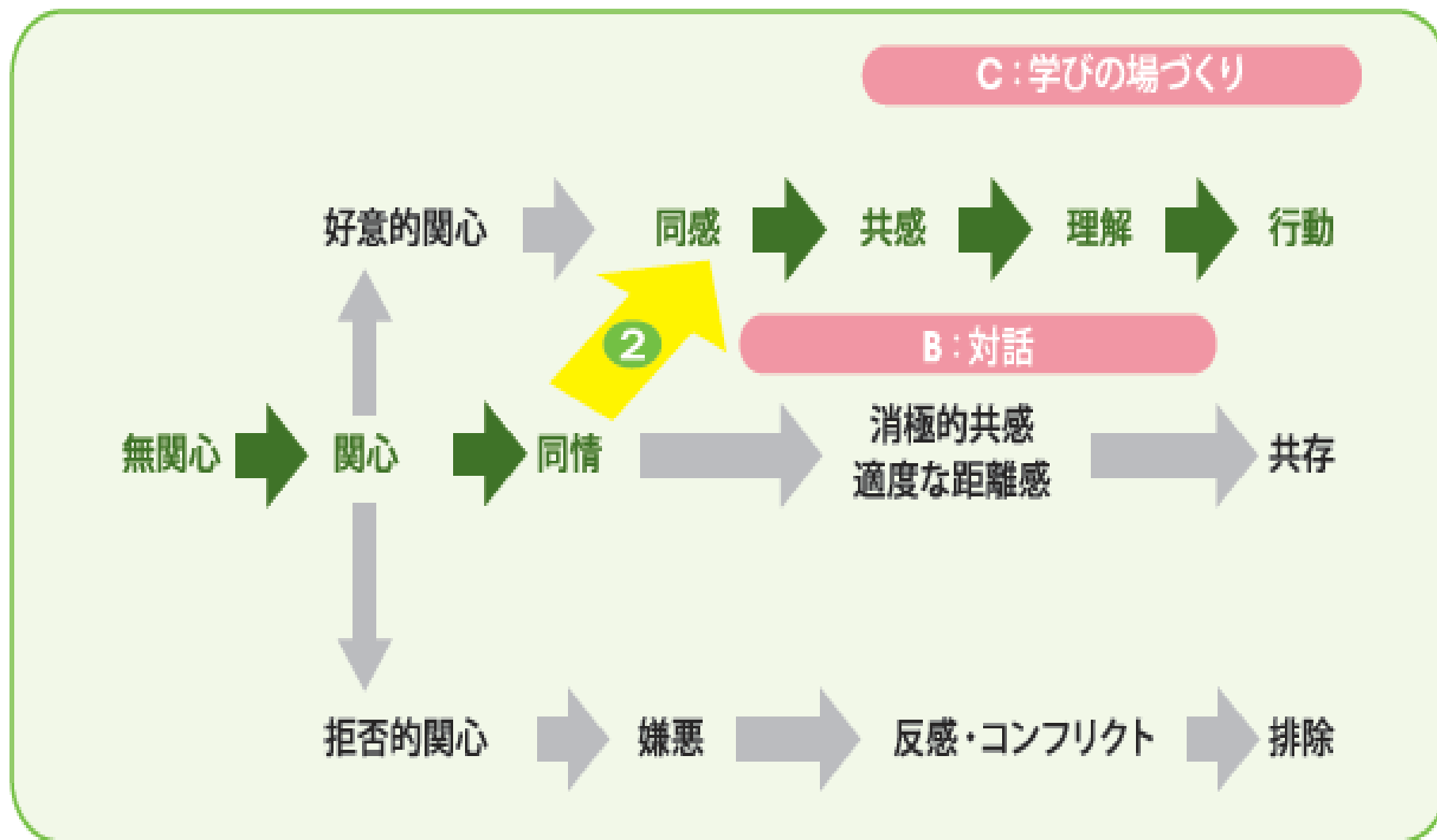


〈学びによる福祉意識の変化①〉

「好意的な関心」の喚起

- 一般論としての啓発・広報では限界
従来のコミュニティワークのままでいいのか
今までの福祉教育実践でいいのか
- 社会問題 「〇〇問題とは何か」ではなく、
具体的な「その人」や「今ここにある課題」
について関心をもつ。
- ホームレス問題、障害者問題としてではなく、
Aさんはどんな方なのか、Aさんの状況を知る。

「同情」から「同感」へ 「消極的共感」への着目



〈学びによる福祉意識の変化②〉

共感・当事者性を育む

- 「共感」の幅

消極的共感(この人のことは理解してもいい)
共生まで至らなくても、共存できるようにする
仲良くなれなくても、仲間外れにしない

- 自らのこととして捉えることができる

「かわいそう」(対象化) → 「私と同じところもある」(接点)
意識化／リフレクションを丁寧におこなう
「接点を探す営み」

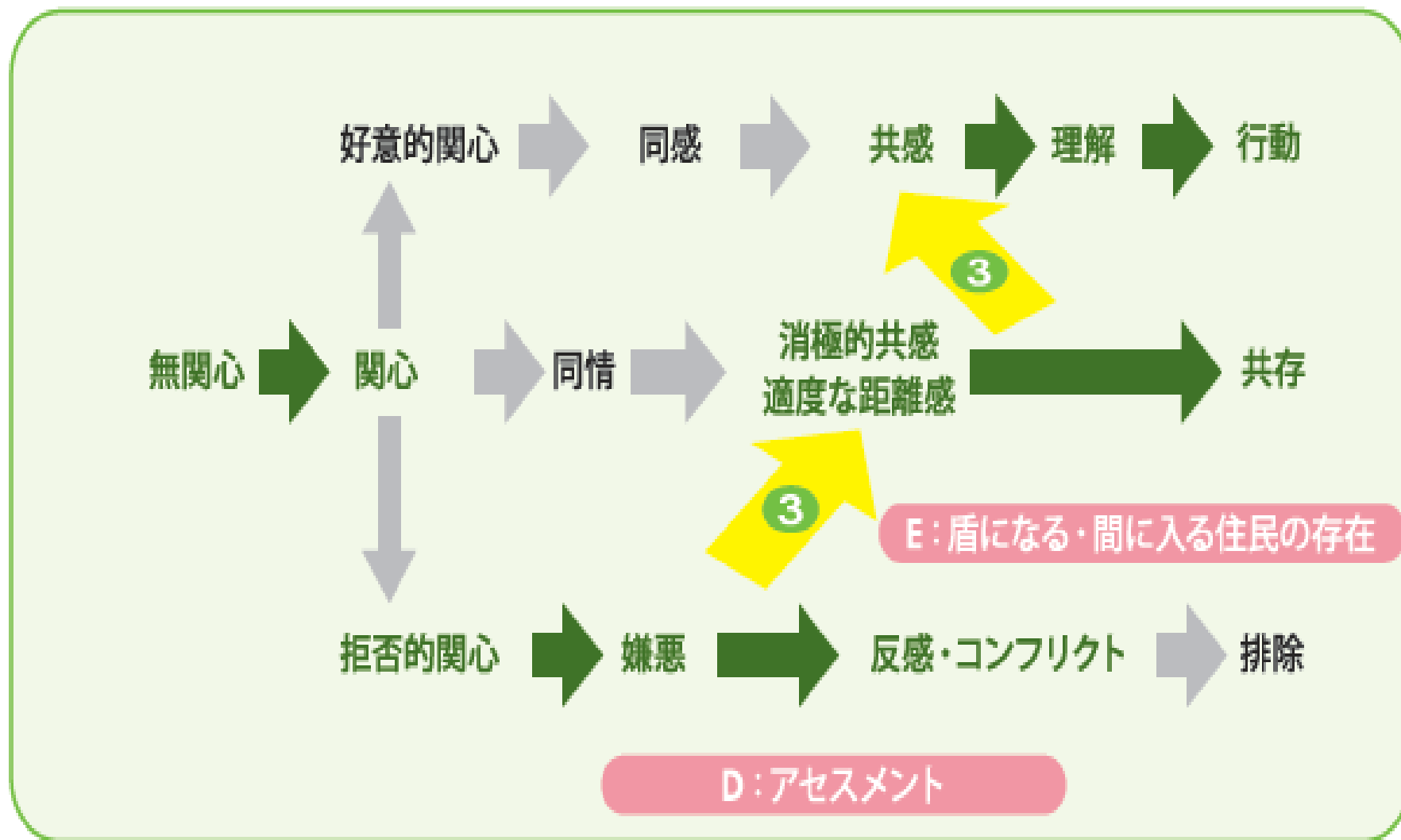
- 「対話」を通して関係性を育む

その人のストーリー(物語)を大切にする

- 積極的共感(問題の共有化・一体的感情)

自らのこととして代弁・共鳴ができる。(advocacy)

「共感」への促し 「コンフリクト」への対応

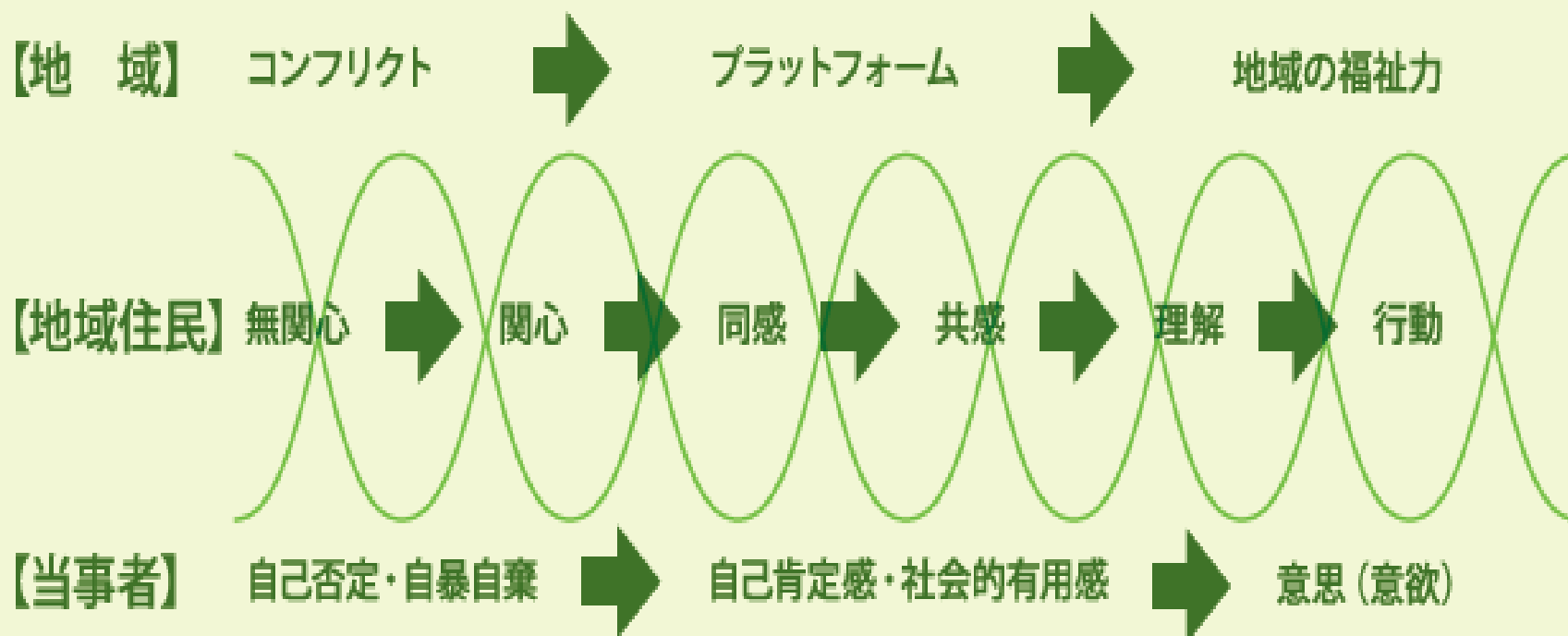


〈学びによる福祉意識の変化③〉

「共存」を促していく

- コンフリクト（葛藤や対立）
コンフリクトを生じさせないための働きかけ
地域のアセスメント（権力構造）
個別化する 集団にすることで沈黙が起こる
不安を言語化させない／正義のヒーロー化
- 「悪者」をつくらない。折り合いをつけていく。
話し合う場づくり
- 「この人は同じ住民だ」という「盾」をつくる
難しいことはわからないが、この人は大丈夫。
この人のことは、よく知っている。

福祉教育の推進とCSW 生活困窮者支援の3つの「エンパワメント」



〈3つのエンパワメント〉

3つのエンパワメント

- 当事者のエンパワメント

 - 本人が「語る」ことができる

 - 本人とまわりの関係を紡いでいく

 - 本人の生きる意欲を促す

- 地域住民のエンパワメント

 - 無関心—関心—同感—共感—理解—行動

- 地域のエンパワメント

 - 葛藤・対立—協働の場—地域の福祉力